掲載日:2011年04月10日,面名:S306X0,記事ID:K20110410S306X0030
(C)河北新報社

陸前高田 仮設住宅入居始まる

生活再建へ一歩

36戸、被災地で初めて

津波により壊滅的な被害を受けた陸前高田市で9日、被災地で初めて仮設住宅への入居が始まった。入居が決まった住民は冷たい雨の中、避難所になっている第一中の校庭に建てられた36戸に次々と荷物を運び込んだ。

完成した仮設住宅は台所、トイレ、風呂付きの2DKタイプ（約30平方㍍）で、半数の18戸は高齢者や障害者、母子世帯向け。日本赤十字が贈った冷蔵庫や洗濯機、テレビなどの家電も各戸に備えられている。

家族4人で避難所から引っ越しした主婦熊谷栄子さん(35)は「まだ不安は残るが、仮設住宅での生活を再スタートと思って頑張る」と話した。

今回入居が始まった36戸は、3月19日に着工。5日の抽選会には116O世帯が応募し、競争率は約32倍だった。

市は希望する住民全員分の仮設住宅を用意する方針で、市内3カ所に現在、計約200戸を建設している。今後も建設を続けていく。

被災3県の仮設住宅の目標戸数は、避難者数が最も多い宮城が3万戸で、岩手1万8000戸、福島1万4000戸の計6万2000戸となっている。これに対し、7日現在の着工戸数は宮城14337戸となっており、目標の1割にも達していない。

被災地で最も早く完成した仮設住宅に入居した避難家族＝9日午前11時35分ごろ、陸前高田市の第一中校庭